

インドネシアにおける容姿の規定メカニズムの計量分析 —美しさは生まれつきか、合理的な投資戦略か—

Quantitative Analyses of Determinant Mechanism of Beauty in Indonesia: Is Beauty Nature or Rational Investment?

小林 盾* 西村 謙一**
Jun Kobayashi Kenichi Nishimura

Abstract

This paper scrutinizes the determinant mechanism of beauty in Indonesian society. The literature has revealed diverse social consequences of physical attractiveness. Still, it has been left unsolved whether beauty is naturally determined or intentionally achieved. Data were collected in 2018 Opinion Survey on Local Governance in Indonesia. A representative sample in Java was chosen and analyzed with 3,212 respondents. Interviewers evaluated respondents' beauty and skin brightness on five-point scales. Key findings include, first, that education and income increased skin brightness. Second, while skin brightness did boost beauty levels, education and income also raised it. This implies that different socio-economic status groups use different strategies of investment in beauty capital, which is changeable and controllable. Therefore, beauty depends, at least partly, on individual attainment.

I. 問題

1. 豊かになったインドネシア社会

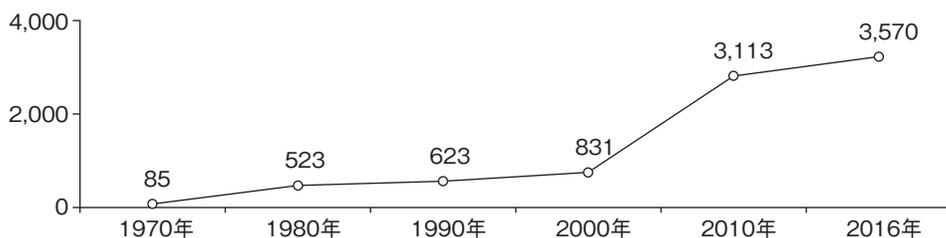
世界銀行によれば、1970年から2016年にかけて、インドネシアにおける1人あたり国内総生産(GDP)は、85ドルから3,570ドルへと約42倍になった(図1)。とくに2000年以降の上昇がおおきい。

このように、インドネシア社会は過去40～50年のあいだに、経済面で飛躍的に豊かになった。すると、人びとは生活に余裕ができるため、衣食住だけでなく服装、化粧、髪型、スタイル(体型)といった「見た目」にも気をつかうようになることだろう(この論文ではそうした見た目のよさを「容姿」とよび、その水準を「容姿レベル」とよぶ)。その結果、容姿に力をいれる人とそうでない人のあいだで、容姿レベルの格差が発生している可能性がある。

* 成蹊大学文学部、Faculty of Humanities, Seikei University
jun.kobayashi@fh.seikei.ac.jp

** 大阪大学国際教育交流センター、Center for International Education and Exchange, Osaka University
knishi@ciee.osaka-u.ac.jp

図1 インドネシアの1人あたり国内総生産（国内総生産（GDP）の推移（単位ドル）



出典：世界銀行。

2. リサーチ・クエスチョン

インドネシアをふくめアジア社会では、肌が明るい人（肌明度が高い人、肌が白に近い人）ほど、容姿が高く評価されがちという（Taipei Times 2004）。とすると、一見すると肌明度は生まれつきのため、容姿も生まれつき決定されているようにみえる。

もちろん、肌明度も容姿も、あるていど生まれつきの部分があるだろう。しかし、すべてではないはずだ。たとえば、年齢とともに肌は自然と「くすむ」ものだが、スキン・ケアをするなど対策をとれば、肌明度が維持されやすい。さらに、化粧、服装、髪型を工夫することで、容姿の印象がおおきく変わる。見た目のために、ダイエットしたり、歯のホワイトニングをしたり、健康的な食事をこころがけたり、エステにかよう人もいるだろう。

したがって、肌明度も容姿も、けっして生まれつきだけできまるわけではない。むしろ、環境や経験といった、後天的要素の余地もあろう。そうであるなら、美容の維持や向上のために高い意識をもったり、努力をつづけたりすることで、容姿レベルはあるていどコントロールでき、獲得できるものとみなすほうが自然だろう。

そこで、この論文ではつぎのリサーチ・クエスチョンをたててアタックする。

リサーチ・クエスチョン インドネシア社会において、人びとの容姿レベルは、生まれつき決定されているのか、それとも後天的に獲得されたものなのか。

この問題を解明できれば、人びとが容姿を向上させたいとおもったとき、「なにをすればよいか」「なにをすればいけないか」というヒントを提供することができる。しかし、もし未解明のままだと、容姿における不平等が拡大しても、ともすればみすごされてしまいかねない。

3. 先行研究

容姿の規定要因（原因）についての知見は、限定されている。Hamermesh（2011）によれば、おおむねどの社会でも「若い」ほど容姿が高く評価される。

容姿のよさの帰結（結果）については、欧米社会について知見が蓄積されてきた。Hamermesh and Biddle（1994）によれば、容姿がよい人ほど収入が高く、その効果は男性のほうが強い。Buss（1994）によれば、容姿のよい女性は高教育の男性と結婚し、また夫婦の容姿レベルは近くなる。Umberson and Hughes（1987）によれば、容姿がよい人ほど、満足や幸福を感じやすい。

日本社会ではどうか。山田・白河（2008）によれば、男女ともに恋愛や結婚において、容姿

のよさが役だつ。谷本（2015）は、美容整形することを「外見資本への投資」ととらえ、短大卒や専門学校卒の女性に多い。小林・谷本（2016）によれば、容姿がよい人ほど役職につき、収入が高く（男性のみ）、結婚子どもがいた。なお、美容についての一般書は多数ある（神崎2015、岡本2016、ワタナベ2018など）が、研究は少ない。日本における美容の状況は谷本（2008）、谷本（2018）に詳しい。

Bjerk（2009）は理論的に、結婚市場で女性が自分の容姿を男性の所得と交換すると想定した。Hakim（2011）は、容姿の社会的役割を理論的に整理し、経済資本、文化資本（Bourdieu 1979）、社会関係資本（Lin 2001）とならんで、個人の資産とみなすことを提案する（erotic capitalとよぶ）。

ただし、これまで肌の明るさがどれだけ容姿に影響するのは、未解明であった。また、東南アジア社会については、そもそも容姿の測定がされたことはない。

4. 仮定と仮説

この論文では、Hakim（2011）や谷本（2015）と同じように合理的選択理論にたつて、人びとはあたかも株や土地に投資するように、自分の容姿に投資し、そこから成果を引き出すと仮定しよう（合理的選択理論の概要は小林2017c）。ここでは投資対象を、小林（2017b）と同じく「美容資本」とよび、以下のように定義と仮定をする（図2）。美容資本は、人的資本の1つの形といえる（人的資本についてはBecker 1964）。ウェル・ビーイングには、幸福感、満足度、健康がふくまれる。

定義 人びとが時間や労力を自分の容姿に投資して、容姿を維持・向上させ、（教育・職業・収入といった）地位達成、（恋愛・結婚・出産といった）家族形成、（幸福・満足・健康・ストレス低下といった）ウェル・ビーイングなどから回収するとき、「美容資本に投資する」という。美容資本は人的資本のひとつであり、投資によって容姿が変化しうる。美容資本への投資には、心理面で美容規範、美容意識、流行への関心、行動面で雑誌などからの情報収集、身だしなみ、服装、髪型、化粧、スキン・ケア、ネイル、歯のホワイトニング、香水、ダイエット、エステ、美容整形、健康的な飲食、運動などがある。

仮定1 人びとは時間や労力を人的資本としての美容資本に投資して、美容資本を蓄積し、キャリア形成、家族形成、ウェル・ビーイングなどとして回収する。投資に見合う回収ができるなら、人びとは合理的に投資する。

このように定義することで、人びとの容姿は生まれつき固定されたものではなく、コントロール可能で「努力によって変わるもの」ととらえることができる。そこで、この論文では肌明度と容姿を、美容資本の2形態とする。もし美容資本に合理的に投資した結果、肌明度や容姿に違いが生まれたなら、それらは「生まれつき」だけでなく、「合理的投資」の結果として後天的に達成されたものでもあったことになる。

では、人びとはどのように美容資本に投資するのだろうか。ここではBecker（1981）にならい、教育、職業、収入といった階層的地位グループごとの投資戦略をかंगाえたい。Becker（1981）によれば、階層的地位によって、出産のための投資戦略が異なる（階層的地位が高い人ほど、少数の子に高い人的資本を集中的に投資する）。

同じように、階層的地位によって容姿への態度が異なり、美容資本への投資戦略が異なると仮

図2 仮定1（美容資本への投資と回収）



注記：この論文では美容資本として肌明度、容姿を分析する。

定しよう。階層的地位が高い人ほど、投資は多いかもしれないし、少ないかもしれない。ここでは、階層的地位が高い人ほど「美容に投資すべき」という規範をもちやすく、美容意識が高くなり力をいれるため、自分の美容資本におおく投資すると想定してみる。

仮定2 階層的地位によって、美容資本への投資戦略が異なる。階層的地位が高い人ほど、美容への投資規範がつよいため、美容資本におおく投資する。

ここから、第一の仮説として、肌明度の規定構造について以下を想定できる（図3は仮説をあらわす）。

仮説1（肌明度の規定構造） インドネシア社会において、教育・職業・収入における階層的地位が高い人ほど、肌明度におおく投資するという戦略をとるため、肌が明るいだらう。

容姿の規定構造はどうだろうか。第二の仮説として、同じように以下を想定できよう。

仮説2（容姿の規定構造） インドネシア社会において、教育・職業・収入における階層的地位が高い人ほど、（肌明度以外の）容姿におおく投資するという戦略をとるため、（肌明度の影響をさしひいてもなお）容姿がよいだらう。

II. 方法

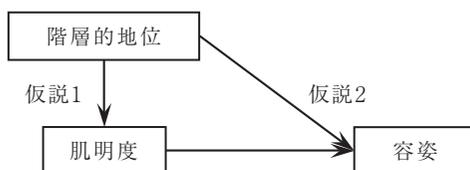
1. データ

データとして、2018年インドネシアの地方自治意識調査をもちいる。これは確率比例抽出にもとづいた量的調査で、訪問面接が2018年5～6月にインドネシアで実施された（調査の実施の様子は図4）。母集団は、ジャワ島の全112県市と、特別州の2市（ジャカルタ首都特別州の東ジャカルタ市、ジョグジャカルタ特別州のジョグジャカルタ市）の114県市における20歳以上個人である（特別州はこの2つのみ存在）。

計画標本は、各県市から5区村、各区村から3隣組、各隣組から2人（男女一名ずつ）が（すべて名簿によって）確率比例抽出され、合計3,420人だった。拒否などがあった場合、男女を維持しつつ、つぎの該当者が予備標本として使用された（予備標本使用は有効回収のうち10.6%）。

有効回収数は3,412人、有効回収率は99.8%だった。年齢不明2名を無効票としてのぞいた。謝礼として、調査会社名いりのティーシャツを提供した（図4右）。

図3 仮説



注記：矢印は因果関係を表す。

図4 調査員へのインストラクション（左）、実査（中央）、謝礼ティーシャツ（右）



注記：インストラクションは、ジャカルタ郊外の南タンゲラン県チプタ村で実施されたもの（中央起立が筆者小林）。実査は東ジャカルタ市チププール村で実施されたもの（左が調査員、中央が対象者、右が筆者小林）。

2. 標本

分析では、サブ標本3,212人を対象とする。内訳は、男性50.2%、平均年齢45.6歳、未婚7.0%／既婚84.1%／離別2.1%／死別6.7%、平均世帯人数4.3人、平均子ども数2.3人、平均教育年数8.6年、公的教育なし6.1%／小学校卒41.1%／中学卒17.6%／高校卒24.7%／短大卒2.7%／大学卒7.2%／大学院卒0.6%、フルタイム労働者13.2%／パートタイム労働者20.5%／自営・家族従業員36.0%／主婦・主夫22.1%／無職8.2%、平均等価所得1,714.6万ルピアであった（1万ルピアは約80円）。

3. 従属変数：肌明度、容姿

仮説にもとづき、肌明度と容姿を従属変数とする（変数の記述統計は表1）。どちらも、自己評価より他者による評価のほうが正確なため、聞きとりがおわってから調査員が評価し記入した。以下のように、まず容姿を、つづいて肌明度を質問した。Hamermesh（2011）にしたがい、評価対象は「髪型をふくむ顔」とし、服装やスタイルはのぞいた。

質問1（容姿） 対象者は、どれくらいハンサム・美人でしたか。髪型をふくむ顔が対象であり、服装やスタイルは考慮しないでください。

- 1 あなたの担当した対象者のなかで、もっともハンサム・美人でない20%
- 2 つぎの20%
- 3 つぎの20%
- 4 つぎの20%
- 5 もっともハンサム・美人な20%

表1 変数の記述統計

	変数	平均・比率	標準偏差	最小	最大	備考
従属変数	肌明度	2.9	1.2	1	5	5がもっとも明るい
	容姿	3.0	1.3	1	5	5がもっともハンサム・美人
独立変数	教育（教育年数）	8.6	3.9	0	18	単位年
	職業（有職ダミー）	69.7%	0.5	0	1	
	収入（等価所得）	1,714.6	2,025.9	53.7	23,555.9	単位万ルピア
統制変数	性別（男性ダミー）	50.2%	0.5	0	1	
	年齢	45.6	14.1	20	92	単位歳
	婚姻状態	（非該当）	（非該当）	（非該当）	（非該当）	未婚、既婚、離死別で分析

注記：N = 3,412。教育年数は公的教育なし0年、小学校6年、中学9年、高校12年、短大14年、大学16年、大学院18年（中退も卒業としてあつかう）。婚姻状態はカテゴリのため、平均などが非該当。

質問2（肌明度） 対象者の肌は、どれくらい明るかったですでしょうか。

- 1 あなたの担当した対象者のなかで、もっとも暗い20%
- 2 つぎの20%
- 3 つぎの20%
- 4 つぎの20%
- 5 もっとも明るい20%

容姿は質問1のように、調査員が担当した対象者のうちで、相対評価とした。調査員は原則として2～3村を割りあてられるため、12～18名ほどの回答者を担当する。かならず対象者の写真を2枚撮影し、自分の担当がすべて終了してから、全員をふりかえって評価した。

たしかに、Hamermesh (2011)、小林 (2017a) など多くの先行研究は、「もっともハンサム・美人でない」から「もっともハンサム・美人」までのように、選択肢を絶対評価とすることが多い。しかし、先行研究では分布が「よい評価」に偏りがちであると報告されており、今回ブリテスをした結果でもそうだった。そのため、相対評価を採用することとした。

なお、調査員によって評価に偏りがあるかもしれない。そこで、調査員の性別、年齢を独立変数として、肌明度と容姿を従属変数とした回帰分析をおこなったが、有意な効果はなかった。そのため、調査員の属性による偏りはないと判断できる。

4. 独立変数、統制変数、分析方法

独立変数には、仮説にもとづき、階層的地位として教育（教育年数、中退も卒業としてあつかう）、職業（従業上の地位）、収入（等価所得）の3つをもちいる。従業上の地位は、有職と無職の2カテゴリで分析し、ベースラインは無職とする。教育年数が長いほど、有職者ほど、収入が多いほど、階層的地位が高いとみなす。

統制変数として、性別（男性ダミー）、年齢、婚姻状態の3つを使用する。婚姻状態は未婚、既婚、離死別の3カテゴリで分析し、ベースラインは未婚とする。

分析では、独立変数と統制変数もちいて、肌明度と容姿を従属変数とした回帰分析をおこなう。独立変数である階層的地位と、統制変数のうち婚姻状態は、後天的に達成されるものである。

図5 従属変数である肌明度、容姿の評価の例



注記：筆者小林撮影、本人の許可をえて掲載。左は20代男性、肌明度1（もっとも暗い）、容姿3。右は50代女性、肌明度5（もっとも明るい）、容姿4。

図6 従属変数である肌明度、容姿の分布



注記： $N = 3,412$ 。どちらも分散分析で0.1%水準で有意。

そのため、もし生まれつきですべてが決定されるなら、性別と年齢のみ有意な効果をもち、他は（後天的要因のため）効果がないはずである。

III. 分析結果

1. 分布

図5が従属変数である肌明度と容姿の評価の例をしめし、図6が分布をあらわす。どちらも一山の分布で、ほぼ左右対称だった。表1より、肌明度の平均が2.9、容姿が3.0と、近かった。

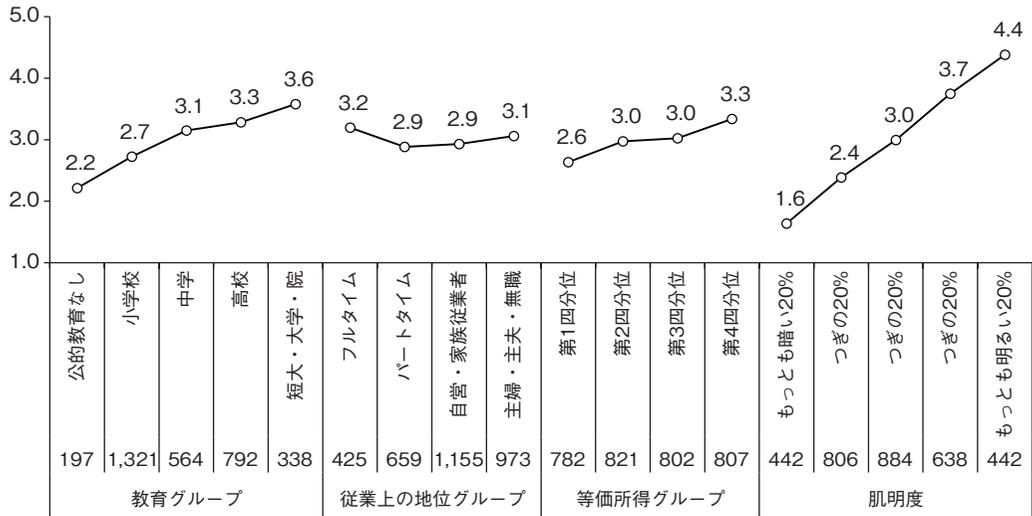
選択肢は「20%ずつ」となっていたが、やはり「最低の評価」や「最高の評価」は避けがちだったようである。それでも、Hamermesh（2011）では5段階の容姿評価のうち最低が1～2%、最高が2～3%であったので、それとくらべると散らばりがずっと大きかった。

2. グループ別比較

グループ別に従属変数を比較すると、どうなるか。図7が、独立変数である階層的地位グループ別の、容姿の平均をあらわす。教育が高い人ほど、フルタイム労働者や主婦・主夫・無職ほど、等価所得が多い人ほど、容姿がよかった（すべて分散分析で0.1%水準で有意な差）。肌明度でも、同じ有意な差が観察された。

では、肌明度は、容姿に影響するののか。図7より、肌明度があがるほど、容姿が明確によくなっ

図7 階層的地位グループ別、容姿の平均の比較



注記：N = 3,412。グループ名下の数字はグループ別標本サイズ。等価所得の第1四分位は692.8万ルピアまで、第2は1141.6万ルピアまで、第3は2039.3万ルピアまで、第4はそれ以上。すべて分散分析で0.1%水準で有意。

た(分散分析で0.1%水準で有意な差)。もっとも暗いグループでは、容姿の平均が(1～5のうち)1.6だったが、もっとも明るいグループでは4.4となった。

なお、(図表は省略したが)統制変数の効果を確認すると、肌明度と容姿ともに、女性ほど、若い人ほど、未婚者や既婚者ほど(未婚者がもっとも高い)、評価が高かった(すべて分散分析で0.1%水準で有意な差)。

3. 回帰分析

こうした効果をたがいに統制すると、どうなるか。表2が、肌明度、容姿をそれぞれ従属変数とした回帰分析の結果を報告している。

表2によれば、肌明度は、教育年数が長い人ほど、無職者ほど、等価所得が多い人ほど、有意に高かった。したがって、教育と収入については、階層的地位が高い人ほど、肌明度が高いことがわかった。職業については、有職者より無職者のほうが肌が明るいのは、(主婦として)女性が多いためかもしれない。統制変数のうちでは、女性ほど、また若い人ほど、有意に肌明度が高かった。

では、容姿の規定構造はどうだろうか。表2のモデル1によれば、教育年数が長い人ほど、等価所得が多い人ほど、容姿が有意によかった。有職かどうかは、有意な効果をもたなかった。

モデル2で肌明度が独立変数にくわると、肌明度が有意な正の効果をもった。つまり、肌が明るい人ほど、容姿が有意によかった。ただし、にもかかわらず階層的地位の影響は不変のままだった。したがって、容姿のよさは、肌明度をさしひいてもなお、教育と収入という階層的地位に左右されていた。

統制変数のうち、モデル2では女性ほど、若い人ほど、(未婚者とくらべて)既婚者ほど、有意にハンサムや美人と評価された。

表2 肌明度、容姿を従属変数とした回帰分析結果

	従属変数					
	肌明度		容姿			
			モデル1		2	
男性ダミー	-0.168	***	-1.936	†	4.943	***
年齢	-0.123	***	-9.827	***	-7.620	***
既婚ダミー	-0.009		1.454		2.199	*
離死別ダミー	-0.011		0.771		1.340	
教育年数	0.199	***	9.370	***	3.590	***
有職ダミー	-0.063	***	-1.642		0.752	
等価所得	0.079	***	4.552	***	2.264	*
肌明度					47.647	***
決定係数	0.137		0.121		0.486	

注記：N = 3,412。値は標準化係数。既婚ダミーと離死別ダミーのベースラインは未婚、有職ダミーのベースラインは無職。*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$ 。

4. 頑健性のチェック

男女別で分析しても、おおむね同じ結果がえられた。20歳ごとの年齢階級別（20～30代、40～50代、60代以上）で分析したところ、おおむね同じ結果がえられたが、60代以上で階層的地位の効果がなくなった。これは、この年齢だと多くの人が定年退職するためかもしれない。

独立変数として教育年数のかわりに高校以上ダミーをもちいても、職業として有職・無職のかわりに雇用者・自営・無職をもちいても、等価所得のかわりに個人収入や世帯収入をもちいても、おおむね同じ結果がえられた。統制変数に世帯人数、子ども数、身長、体重、BMI（肥満度をあらわす体格指数）を追加しても、どれも有意な効果をもたず、同じ結果がえられた。

IV. 考察

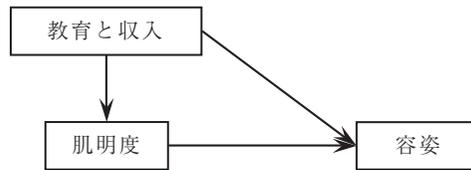
1. 分析結果の要約、仮説の検証

図8が、分析結果を要約している。このように、教育と収入が高い人ほど、肌が明るく、さらに容姿がよかった。このとき、階層的地位のうち職業の効果はなかったが、教育と収入が容姿にたいし、肌明度を經由しながらも、それとは別にダイレクトな独自の効果をもっていたことに注意したい。したがって、教育と収入における高い階層的地位が、肌明度と容姿をそれぞれ向上させていた。

かりに、収入だけが容姿を向上させたなら、それは「より美容にお金をかけたからだ」と解釈することもできる。しかし、教育も独自の効果をもったため、「美容に投資するべき」という規範意識や、それにもとづく投資戦略が媒介していたと解釈するべきだろう。以上から、2つの仮説について以下のように検証結果をまとめることができる。

仮説の検証結果 仮説1（肌明度の規定構造）は、おおむね支持された。インドネシア社会において、教育と収入における階層的地位が高い人ほど、肌が明るかった。ただし、職業では無職者のほうが肌が明るかった。仮説2（容姿の規定構造）も、おおむね支持された。教育と収入における階

図8 分析結果の要約



注記：矢印は表2における有意な効果を表す。肌明度は、無職者によっても促進された。

層的地位が高い人ほど、容姿がよかった。ただし、職業の効果はなかった。

2. リサーチ・クエスチョンへの回答

では、リサーチ・クエスチョンにどう回答できるだろうか。かりに、人びとの容姿レベルが生まれつきすべて決定されていたなら、後天的達成である階層的地位の違いをもたらさないはずである。しかし、図8の分析結果のとおり、階層的地位が肌明度と容姿を促進した。

そのため、もし仮定2が正しいならば、階層的地位の高い人たちと低い人たちで、容姿への戦略が異なるためだったと推測できる。高階層者ほど、見た目への規範意識が強く、そのため多くの時間や労力を美容資本に投資する。そのいっぽう、低階層者ほど、意識することが少なく、あまり美容資本に投資することがない。以上をまとめると、リサーチ・クエスチョンに以下のように回答できる。

リサーチ・クエスチョンへの回答 インドネシア社会において、人びとの容姿レベルは、生まれつきすべてが決定されているわけではなく、美容資本への合理的な投資戦略の結果として獲得されたものでもあった。異なる階層的地位の人たちは、異なる戦略をとっていた。とくに、教育や収入による階層的地位が高い人ほど、おおく投資するため、肌明度も容姿レベルも高かった。

たとえるなら、容姿とは「家をたてること」に似ているかもしれない。たしかに、たてた段階で家ごとに個性があり、立派な家もそうでない家もあるだろう。ただし、20年40年と経過するあいだ、リフォームや耐震補強など、メンテナンスにじゅうぶんな投資をしつづければ、もとのよさをたもつことができよう。たいして、そうした投資をとくにしなければ、経年劣化は避けられない。

3. 理念型

図7によれば、短大以上の教育をうけたり、フルタイムで働いていたり、収入が社会の上位25%以内なら、容姿はおおむね（最低の1から最高の5のうち）3から4にはいるので、平均を上回るだろう。肌明度がもっとも明るい20%であるなら、4から最高の5の間を期待できる。

たほう、小学校までの教育しかうけられなかったり、パートタイムで働いたり、収入が下位25%以内なら、容姿はおおむね2から3の範囲となるため、平均以下となる。肌明度がもっとも暗い20%であるなら、最低の1から2の間となりそうだ。

ただし、これらはけっして固定されたものではない。むしろ、（あらたに学校にかようなど）時間のなかで変化させることが可能である。そうした未来の可能性を、この論文は明らかにした。

4. 今後の課題

この論文では、インドネシア社会を事例として分析した。しかし、ここでの知見が他の社会でも共通とはかぎらない。そこで、筆者らは現在同じ調査票をもちいて、フィリピン社会でデータ収集することを予定している。他の社会と比較することで、より一般的なメカニズムを解明できるだろう。

分析の結果、収入が高い人ほど容姿レベルが高かった。しかし、もしかしたら因果関係が逆かもしれない。たとえば、容姿がよいためよい仕事につき、その結果高い収入をえた、という可能性も排除できない。さらに、小林（2017b）によれば、日本社会では容姿の原因と結果はおおむね男女で一致するが、異なる部分もあり、いわば「男性リーグと女性リーグ」にわかれているという（たとえば、収入や幸福感は男性の容姿のみが促進する）。この論文では、メカニズムに男女の違いがなかったが、見逃したことがあるかもしれない。

この論文では、「美容資本への投資戦略が階層的地位によって異なる」と想定した（仮定2）。しかし、このことをデータでちよくせつ検証することはできなかった。また、（仮定1の）美容資本への投資が合理的かどうかは、今回確認できなかった。こんごは、インタビューなど質的データも含めて、エビデンスをあつめる必要がある。

【謝辞】

本研究はJSPS科研費JP15H02600の助成を受けたものです。執筆に当たり、岡本正明氏、川端健嗣氏、永井史男氏、長谷川拓也氏、松永由紀子氏、Wahyu Prasetyawan氏から有益なコメントをいただきました。

参考文献

<日本語文献>

- 岡本静香 2016年 『岡本静香のすっぴん美容』東京：光文社。
 神崎恵 2015年 『神崎恵のPrivate Beauty Book』東京：大和書房。
 小林盾 2017年a 「容姿の自己評価は他者からの評価と一致するのか——自計式調査による測定の可能性」『成蹊大学文学部紀要』52号、122-133頁。
 小林盾 2017年b 『ライフスタイルの社会学——データからみる日本社会の多様な格差』東京：東京大学出版会。
 小林盾 2017年c 「合理的選択理論の基礎と応用——実証研究への人的資本、社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）、文化資本をどう応用できるか」『理論と方法』32巻1号、163-176頁。
 小林盾・谷本奈穂 2016年 「容姿と社会的不平等——キャリア形成、家族形成、心理にどう影響するのか」『成蹊大学文学部紀要』51号、99-113頁。
 谷本奈穂 2008年 『美容整形と化粧の社会学——プラスチックな身体』東京：新曜社。
 谷本奈穂 2015年 「美容——美容整形・美容医療に格差はあるのか」小林盾・山田昌弘編『ライフスタイルとライフコース——データで読む現代社会』東京：新曜社。
 谷本奈穂 2018年 『美容整形というコミュニケーション——社会規範と自己満足を超えて』東京：花伝社。
 山田昌弘・白河桃子 2008年 『「婚活」時代』東京：ディスカヴァー・トゥエンティワン。
 ワタナベ薫 2018年 『美人になる方法——運と出会いを引き寄せる25のルール』東京：PHP研

究所.

<外国語文献>

- Becker, G. S., 1964, *Human Capital: A Theoretical and Empirical Analysis, with Special Reference to Education*, Cambridge, MA : National Bureau of Economic Research. (1976年 佐野陽子訳『人的資本——教育を中心とした理論的・経験的分析』東京：東洋経済新報社)
- Becker, G. S., 1981, *A Treatise on the Family*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Bourdieu, P., 1979, *La Distinction: Critique Social du Jugement*, Paris: Minuit. (1990年 石井洋二郎訳『ディスタンクシオン——社会的判断力批判』I、II、東京：藤原書店)
- Bjerk, D., 2009, “Beauty vs. Earnings: Gender Differences in Earnings and Priorities over Spousal Characteristics in a Matching Model,” *Journal of Economic Behavior & Organization* 69, pp.248–59.
- Buss, D. M. 1994, *The Evolution of Desire: Strategies of Human Mating*, New York: New York: Basic Books.
- Hakim, C., 2011, *Erotic Capital: The Power of Attraction in the Boardroom and the Bedroom*, New York: Basic Books.
- Hamermesh, D. S., 2011, *Beauty Pays: Why Attractive People Are More Successful*, Princeton, NJ: Princeton University Press. (2015年 望月衛訳『美貌格差——生まれつき不平等の経済学』東京：東洋経済新報社)
- Hamermesh, D. S. and J. E. Biddle, 1994, “Beauty and the Labor Market,” *American Economic Review* 84(5), pp.1174-94.
- Lin, N., 2001, *Social Capital: A Theory of Social Structure and Action*, Cambridge University Press. (2008年 筒井淳也他訳『ソーシャル・キャピタル——社会構造と行為の理論』京都：ミネルヴァ書房)
- Taipei Times, 2004, “White is still Right? On the surface Anyway,” March 25, p.16.
- Umberson, D. and M. Hughes, 1987, “The Impact of Physical Attractiveness on Achievement and Psychological Well-Being,” *Social Psychology Quarterly* 50 (3), pp.227-36.